八世紀頃迄上らせる事の矛盾を感ぜねばなるまい。九世紀の後半に於て始めて高昌に據り、而してこゝに據つた後にも尙摩尼教の信仰を固持して居つたと記さるゝ回鶻人が、其の名を冠する佛典を既に七・八世紀から高昌及び其の附近一帶の地に殘して居るといふならば、何人もその矛盾に驚かざるを得まい。史上の事實に頓着なく、而して一圖に回鶻文佛典といふ稱呼を尊重して疑はざる人々をして此の矛盾を解釈せしむるならば、恐らくは回鶻人の一部は九世紀の後半、委しく言へば咸通七年以前、既に早くより高昌に住み、また早くより佛教を信奉してゐたもので、此等の人々の殘したものが卽ち此の佛典であるといふに歸するであらう。自分は此の常識的見解に對して兎角の言議を費す前に、先づ回鶻文佛典なるものゝ稱呼について考察して見やう。

露西亞のラドロフ（Radloff）氏は一九一〇年所謂回鶻文の佛典 Tišastvustik の翻譯を出刊したが、その前序第五頁に於て、「茲に刊行する經典の言語は何であるかといふと、回鶻文字で書いてあるから之を回鶻語と稱することが出來るばかりだ」というてゐる。卽ち回鶻文の經典といふのは特に回鶻語と名附け得らるゝ言語によつて書かれて居るが爲に稱せらるゝ名では無くして、單に回鶻文字を以て書かれて居るによるのである。これは獨りラドロフ氏のみならず、其の他の人の考ふる所も同樣と見うける。事實回鶻文と稱せらるゝものは當時の他のトルコ語の文語との間に著しい區別の存するものはないので、漠北に存する有名な闕特勤や敦欲谷の碑文に見ゆる突厥の言語と、音韻も語法もほゞ同一である。それでラドロフ氏は前に述べた所に續て、「これは必ず天山の北方トルコの文語と共に同時に發達したもので、種々の口語を用ひて居つたトルコ族によつて、共通の文語として用ひられたもの